

サラワク州議会選にみる地元政党の圧倒的存在感

山本博之

2016年5月7日に行われたサラワク州議会選挙では、連邦の与党連合・国民戦線(BN)が、BNの中核政党でナジブ首相の出身母体である統一マレー人国民組織(UMNO)による多数の応援を受け、定数82議席の72議席を占めて圧倒的勝利を収めた。半島部に基盤を置く野党・民主行動党(DAP)は、サラワク州議会選挙で候補者を立て続けて17年目の1996年によりやく初当選を果たし、それから15年間で12議席まで増やしてきたが、この選挙で7議席に後退した。

この結果を大雑把に言えばBN(UMNO+地元政党)とDAPが争ってBNが勝ったという図式になるが、それをブミプトラ対華人のように民族別に見るだけでは中央対地方というサラワクの文脈を見逃してしまう。今回の選挙はBNではなくサラワクの地元政党の勝利である。議席増だけでなく、以下に見るように「UMNOは要らない」と公言したことがサラワクの地元政党にとって一番の「勝利」だったのかもしれない。

マレーシアの選挙と言えば、街頭に無秩序に貼られる政党の旗や候補者のポスターが名物だ。地方では手描きのユニークな選挙ポスターも珍しくない。最近はソーシャルネットワークの発達もあって街頭の旗やポスターは減る傾向にあり、サラワク州クチンでも2011年の選挙から旗やポスターが減っているが、今回の選挙でも大き目の道路が交わるラウンドアバウトには与野党の選挙ポスターがいくつか立ち並んでいた。

目立っていたのがサバ州を引き合いに出した選挙ポスターだ。「サラワクの自主権を守れ サバのようになるな」「サバの二の舞になるな DAPが躍進したらUMNOがサラワクに進出してくるぞ」などと書かれている。UMNOがサラワクに進出したら州の自主権が失われてしまうため、UMNOにサラワク進出の口実を与えないようにDAPに議席を与えるなど訴えている。興味深いのは、州の

自主権を唱えてUMNOの進出を嫌うこの選挙ポスターを立てたのがBNだということだ。連邦レベルでUMNOと連立を組み、今回の選挙でもUMNOに多数の応援に来てもらっておきながら、「UMNOが来るぞ」を脅し文句に使っている。そして名指しされた隣のサバ州では、UMNOの地元幹部が、連邦政府からの支援が減るとサラワクのように地元政党だけになってしまい強権的な州首相が出てコントロールがきかなくなるぞと応じた。

一見するとサラワクとサバがけん制しあっているように見えるが、これは連邦政府から譲歩を引き出そうとする工夫の現れである。半島部では与野党の勢力が拮抗しており、BNにとって政権運営のためサバとサラワクの支持は欠かせない。サバもサラワクも州与党はBNだが、サバでは1990年の選挙で地元与党がBNと対決姿勢をとったため、UMNOがサバに進出してサバBNを組織し、2003年以降はUMNOがサバBNの過半数を占めているのに対し、サラワクにはUMNOが進出していないため、地元政党が構成するサラワクBNと半島部のBNが緩やかな連携関係にある。

UMNOの進出でサバは中央の影響下に入ったが、選挙の候補者選びや州の予算などを見ると中央の影響力は助言程度にとどまっており、逆に中央のUMNOにサバBNを支援する必要が強まっている。サラワクは中央のUMNOから指示を受けないという意味では自主性が高いが、選挙や開発政策などで中央から必ず支援が得られるとは限らない。助言を受ける態度を取りつつ支援を引き出すのか、支援を当てにしないかわりに介入も受けないのか、単純に優劣を判断できるものではないが、サラワクは「サバのようにならないように」、サバは「サラワクのようにならないように」とそれぞれ理由をつけて連邦から譲歩を引き出そうとしている。[2016.5.24]

(やまもと・ひろゆき 京都大学)